
 私がなぜ現在の科目を選んだか

「放射線科」

信州大学医学部画像医学教室

野 中 智 文

初期研修医までの私は、一生飽きずに続けられる科に入ろうと考えていました。当時の私は大海を知らない井の中の蛙で、今にして思えばきっとどの科を選んでもその道を究めるには至らず、「飽きた」などと言う暇なく、医者としての人生を終えられるのだと思います。そんな当時の私が放射線科に魅力を感じた理由の1つに、幅広い分野を扱うという点が挙げられます。頭頸部（脳神経、耳鼻科領域）、胸部（呼吸器、心血管、乳腺）、腹部（消化器、産婦人科領域）、骨軟部、核医学、IVR（Interventional Radiology）、放射線治療と、放射線科が携わる領域を挙げ始めればきりがありません。これだけ多くの領域があれば、飽きるどころか全てを究めるのは難しいだろう、というのが当時の私の浅はかな考えでした。患者さん1人に対して関わる領域が1つに留まることは少なく、先ほど挙げた

 私がなぜ現在の科目を選んだか

「血液内科」

信州大学医学部血液・腫瘍内科学教室

松 澤 周 治

学生時代から悪性腫瘍の治療に関して興味があったため、初期研修の際には関連した科をメインにまわらせて頂きました。

その中で、血液内科で研修した際に、驚いたことは、白血病や悪性リンパ腫のかなり進行した状態であっても、基本的には治癒を目指して、寛解導入療法などの強力な抗癌剤治療を行い、仮に再発しても同種造血幹細胞移植を含めて治癒を前提に治療を行うことです。

勿論、高齢の患者さんに対してはそうでない場合も多いですが、血液疾患の場合は、若年の方も多く、患者さん自身やその家族も治療に対するモチベーションが非常に高いです。

実際に、私が指導医の先生と一緒に担当させて頂いた患者さんも、同年代の方でしたが、お子さんの為に治癒を目指して治療を続けていました。同種造血幹細

多くの領域が相互に関わり合いながら診療が行われています。肺癌の患者さんが脳、骨などに転移巣を形成すればその転移先の領域が関わることとなり、転移の評価に核医学検査が行われることも多いです。治療の選択肢には当然、放射線治療も挙がってきますし、IVRに当たる画像ガイド下の腫瘍焼灼術が行われる施設もあります。病気の診断に画像誘導下生検が行われることも多く、これもIVRに当たります。実際に放射線科をローテートしてみると、こういった患者さんの診療において、多分野に渡る知識と技術を持った放射線科医が活躍するということがわかりました。他にも放射線科を選んだ理由はいくつもありますが、ここでは割愛させていただきます。

現在私は「放射線診断専門医」という資格を取得し、肩書上は1人前の放射線科医として日々の診療に励んでおります。立場が変わって今までとは業務の質や量が変わり、飽きるどころか仕事に忙殺される日々ですが、新たな発見も多く、やりがいを感じながら研鑽を積んでおります。少しでも早く「飽きた」と言えるように日々精進していきたいと思っております。

(信大平26年卒)

胞移植を行ったところで、研修は終了してしまいましたが、暫くしてから外来でお会いした時には、働き始めたところで、その元気な姿に非常に感動しました。

その時の経験が、血液内科医になろうと改めて思ったタイミングだったと思います。

この分野では、現在、治療の進歩が凄まじく、新しい治療薬やレジメンが月の単位で出てくる様な時もあります。

所謂、セカンドラインの治療についても多岐にわたっており、再発しても化学療法のみで治癒する可能性や、悪性腫瘍ではあるのですが、抗体薬や免疫抑制薬といった殺細胞性以外の抗癌剤のみで治癒を目指す治療法も検討されています。

患者さん一人一人の状況（遺伝子変異や表面抗原だけでなく、仕事などの生活スタイルの状況）に併せてレジメンも検討できるため、非常に勉強しがいがあります。

更に治療薬が増えていく過程でもあり、医師としても人間としてもまだまだ精進が必要ですが、これからも血液内科医として患者さんに寄り添える医師を目指していければと思っています。

(信大平26年卒)